

## 比良（月繩手）遺跡

今年度は、本遺跡を「比良遺跡」として調査を進めてきたが、調査の結果、遺跡の推定範囲は東西100mにも充たない、幅の狭い微高地上に位置することがわかったため、「比良」という広範囲な地区名を名称として用いるより、調査地区の小字名（月繩手）を名称として用いる方が適切であると考えた。

### 1. 位置・経過

比良（月繩手）遺跡は、名古屋市北部を流れる庄内川右岸の微高地上（名古屋市西区比良二丁目）に位置する。調査は環状2号線（国道302号線）橋脚建設工事に先立ち、昭和62年6月25日から8月14日まで実施し、調査区は東西に三ヶ所（A・B・C区）を設定し、この内明確に遺構が検出できたのはB区のみであった。

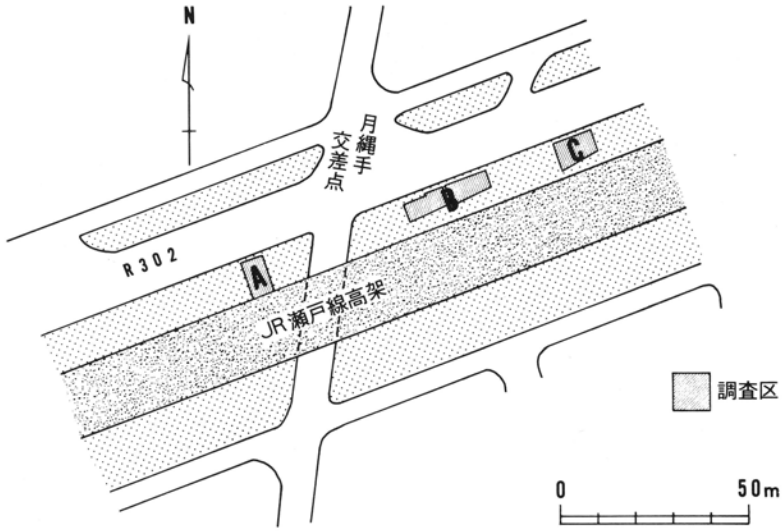
### 2. 層序

基本層序は、A～C区共に現代の水田面によって古墳時代前半の包含層中途まで削平されており、この下に更に各地区同一レベルで砂質シルト（無遺物）層が堆積している。この砂質シルト層を間層として、その下に弥生時代前期の包含層が存在する。この包含層はB区において最も高く、標高3.5m（T・P）を測る。A区との比高は約1m有り、C区では東に向かって緩やかに下って行く。その下に再び砂質シルト層が堆積し、確認しえた最下層は粗砂であった。以上の層序から、本遺跡は大別すると、古墳時代前半と弥生時代前期の2時期に分かれる。以下これを上層・下層と仮称し、紹介する。

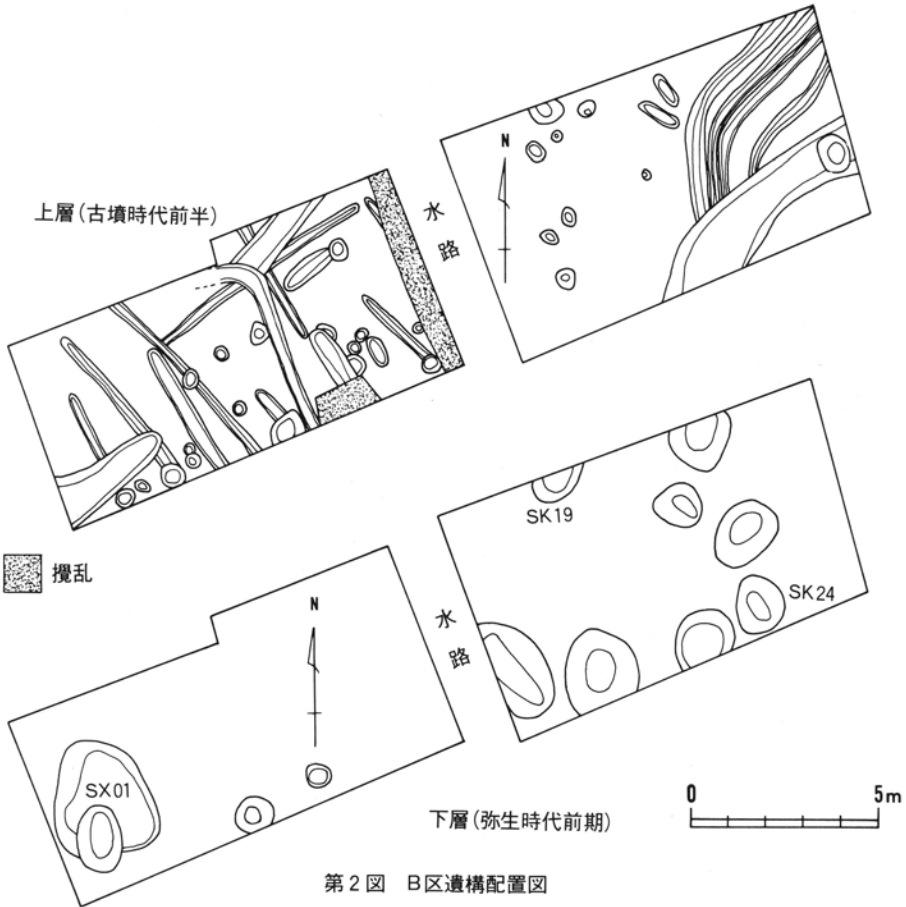
### 3. 遺構

上層では、古墳時代前半の溝、小穴が検出された。溝は最低1回は掘り返された可能性があるが、調査区内で他に関連遺構が検出されていないため、その性格は不明である。同様に多数検出された小穴も、規則性、方向性などが認められないため、性格は不明である。

下層においては、砂質シルト層を全体に除去したところ、完全に埋設しきらずに地表に窪みを残している状態で、土坑状の落ち込みを数か所検出した。これらの他に土坑12基を検出した。この土坑は埋土の分析が未了ではあるが、土器の出土状態などから、廃物処理を目的としたものと思われる。これはこの時期の居住域が近在する可能性を示すものであるが、調査区内では検出できなかった。



第1図 比良(月繩手)遺跡調査区位置図



第2図 B区遺構配置図

#### 4. 遺物

上層の出土物は、ほとんど遺構に伴うかたちで出土していない。須恵器は含まれておらず、土師器によって構成されており、甕、高杯、台付甕、壺等の破片が出土している。時期的には、僅かに含まれる欠山期の物を除いて、元屋敷期以降の物である。

下層の出土遺物は、遺構包含層中を問わず弥生時代前期に限られたことが注目される。石製品、壺蓋、壺、甕、二又柱口状土器片等多数出土している。これらの出土遺物はいわゆる遠賀川系（畿内等Ⅰ様式影響下）土器が主体を成し、少ないながら条痕文系の土器も含まれている。

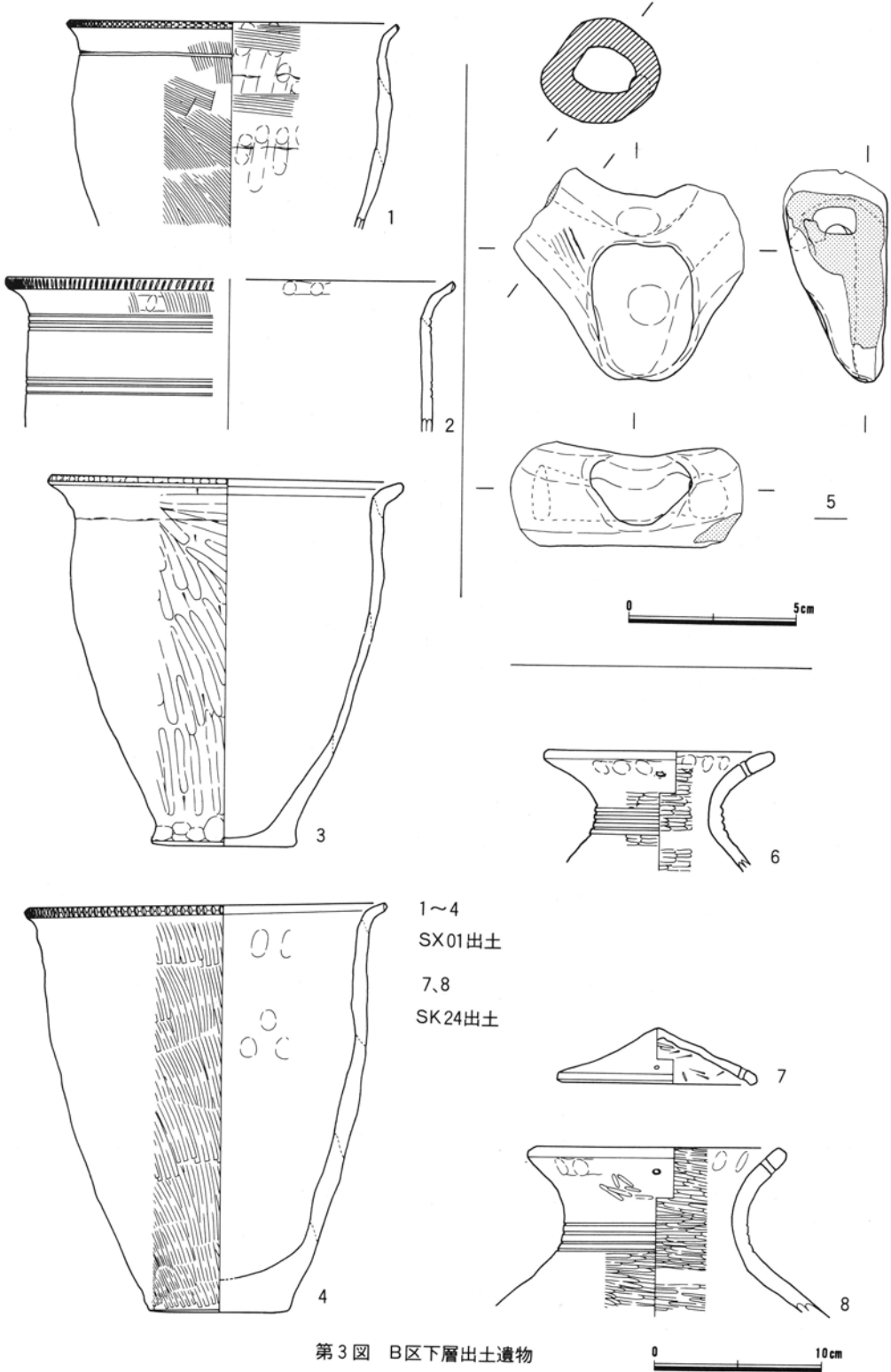
#### 5. 展望と課題

ここで、本遺跡の調査によって提示された問題点と、整理作業を進めて行く上での課題について述べる。

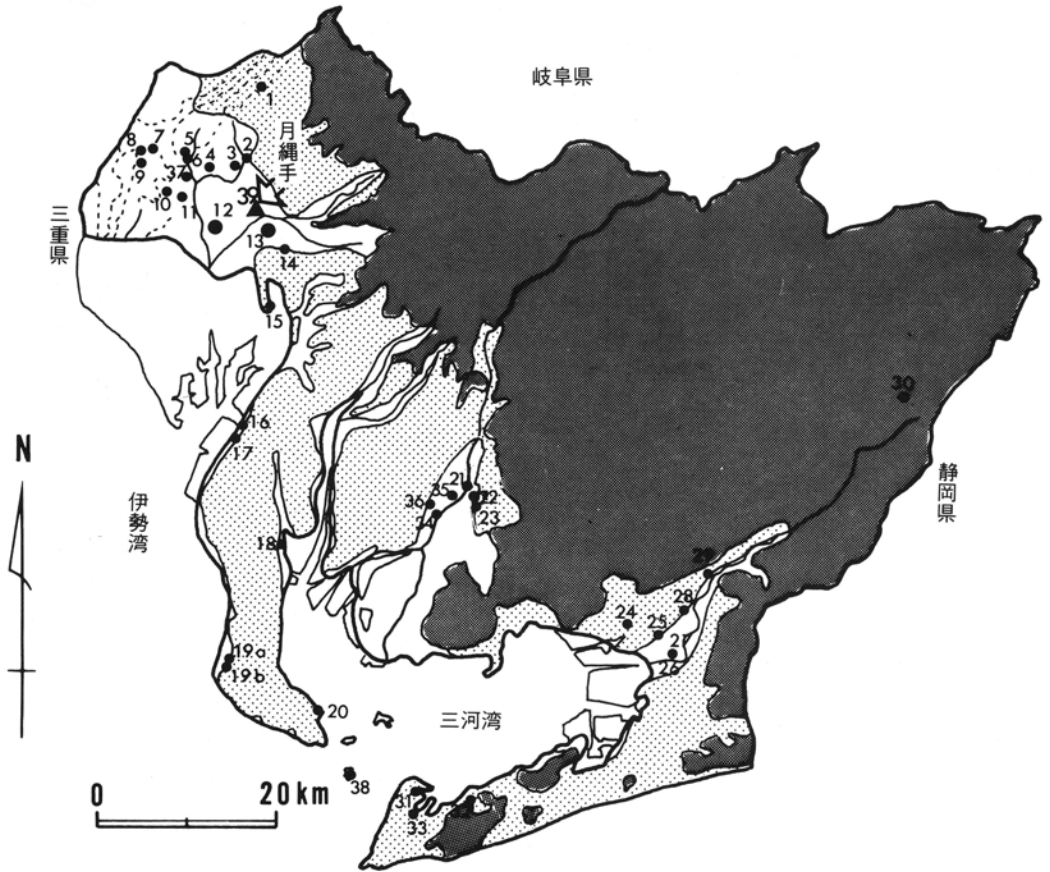
本遺跡では先にも述べたように、古墳時代前半の包含層の下に砂質シルト層を間層とし、弥生時代前期の単純層が検出された。今回の調査ではこの層の検出が最大の成果と考え、以下弥生時代前期の本遺跡に絞って考えてみたいと思う。

地理的な環境においては、A、B、C区の層序が示すように弥生時代前期の段階での本遺跡は、B区がもっとも高い面でありA区、C区との対応関係を考えた場合、南北の狭い微高地上に立地していると考えられる。そして露呈していたはずであったこの部分が、何らかの自然的要因によって水の影響を強く受ける環境へと変化したらしいことが、砂質シルト層の堆積状況から窺える。再び水の影響が少なく、人々が生活の営みの痕跡を残せるような露呈した状況に戻るのには、古墳時代を待たねばならなかった。この間に砂質シルト層の堆積によってパックされた状態になり、地形はこの堆積によって微高地をも消失させ、起伏の少ない環境へと変化して行ったわけである。したがって、弥生時代前期の本遺跡の地形については、地籍図等による想定は不可能であり今後の周辺資料の増加に期待したい。

弥生時代前期の尾張北西部は、稲作農耕を伴う前期弥生文化の伝播を語る時、必ずと言って良いほど紹介される地域である。それはこの地域が面的な意味で、前期弥生文化が直接影響を及ぼした地域の東端にあたるからである。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて東海地方西部を中心とする地域には、条痕文系土器文化が繁栄した。この地域に西から稲作を伴う遠賀川系土器文化が伝播し、条痕文系土器文化と接触を持ちながらも、二つの文化がそれぞれどちらに吸収されることもなく共存した、と現在まで説かれている。しかし尾張北西部の弥生時代前期の様相は、こうした説が語られているにもかかわらず、その接触状況や共存状況を具体的に示すような、良好な同時代資料に乏しいのが現状である。



第3図 B区下層出土遺物



番号	遺跡名	所在地	番号	遺跡名	所在地
1	西浦	丹波郡大口町	22	高木	岡崎市
2	曾野	岩倉市	23	神明	岡崎市
3	のんべ	岩倉市	24	河原田	宝飯郡御津町
4	元屋敷	一宮市	25	樫王	宝飯郡小坂井町
5	馬見塚D地点	一宮市	26	五貫森	豊橋市
6	弥鞆	一宮市	27	大蚊里	豊橋市
7	北川田	一宮市	28	麻生田大橋	豊橋市
8	山中	一宮市	29	水神平	宝飯郡一宮町
9	河田	一宮市	30	桜平	北設楽郡東栄町
10	大塚古墳下層	稲沢市	31	八幡上	渥美郡渥美町
11	清水	稲沢市	32	西郷中	渥美郡渥美町
12	朝日	西春日井郡清洲町	33	保美	渥美郡渥美町
13	西志賀	名古屋市区北	34	亀塚	安城市
14	片山神社	名古屋市区東	35	楠	安城市
15	高蔵	名古屋市区熱田	36	釈迦山	安城市
16	荒古(八幡森地点)	知多市	37	下津城	稲沢市
17	細見	知多市	38	神明社	知多郡南知多町
18	岩滑	半田市	39	比良(月繩手)	名古屋市区西
19 a	下高田	知多郡美浜町			
19 b	下高田(丸山地点)	知多郡美浜町			
20	山田	知多郡美浜町			
21	矢作川河床	岡崎市			

第4図 愛知県遠賀川系土器出土遺跡分布図

愛知県ではこれまで遠賀川系土器が確認された遺跡は、40を数える。もっともこの中には表採資料のみである例<sup>註1</sup>や、わずか数片のみ出土した例、現在では確認が不可能な例等が半数近くを占める。こうした県下の状況のもと、遠賀川系土器が主体的に出土する遺跡の分布に目を向けて見ると、それらは尾張北西部に集中する。今回これに本遺跡が加わったことになる。<sup>註2</sup>この地域の弥生時代前期の遺跡に関しては、高橋信明氏が興味深い分析を行なっている。<sup>註3</sup>氏は尾張北西部に於ける遠賀川系土器が出土する遺跡を、出土遺物の在り方から三パターンに分けている。すなわち縄文晩期土器が主体となる「縄文型」(西浦遺跡が相当)、遠賀川系土器が相対的数量においてのみ優勢



第5図 尾張北西部遺跡分布図

となる「弥生A型」(第5図Aグループ)、遠賀川系土器主体(9割強)の「弥生B型」(第5図Bグループ)である。「縄文型」は扇状地上に、「弥生A型」は丘陵に近い平野部に、「弥生B型」は当時の海岸線に近い平野部に位置する。このような三つのパターンの遺跡の位置関係は、「縄文ムラ」から「弥生ムラ」への変容過程を考える時、重要な意味を含んでいると言えよう。本遺跡は、この三パターンの中では位置的にも内容的にも「弥生B型」に属し、その資料整理に於ける課題も多い。出土土器類の器面調整の検討等は、文化動態を探る上で重要な資料を提供することになるであろう。土壌サンプルによる古墳境の復元、胎土分析による産地同定(他遺跡の資料協力を予定)等の科学分析を含め、広い視野に立った上で整理作業に臨みたいと考えている。(松田 訓)

註

- 1 第4図参照 『マージナル5』 考古学談話会(1985) 所載の分布図をもとに補足、改訂を行なったものである。北村和宏、神谷友和、後藤浩一氏にご教示を得た。38は山下勝年氏に提載の許可をいただいた。
- 2 第5図参照 高橋信明 1985「尾張東北部及び南西部」『マージナル5』 所載の分布図をもとに補足、改訂を行なったものである。
- 3 註2 論文。